

日本音楽学会 2023 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）

一節切尺八・琴・三味線・歌で奏でる「江戸期の音楽」

傍聴記

小沢 優子

「一節切尺八・琴・三味線・歌で奏でる江戸期の音楽」が 12 月 13 日、愛知県春日井市にある中部大学の三浦幸平メモリアルホールで開催された。主催は、日本の伝統文化を学生に触れさせたいという思いで始まった〈中部大学日本伝統文化推進プロジェクト〉。企画代表の加藤いつみ氏は名古屋市立大学名誉教授だが、2016 年に中部大学大学院国際人間学研究科前期課程に入学し、2023 年に後期課程において「一節切尺八の研究」で博士学位を取得されている。今回の企画は、一節切尺八を中心にした実際の演奏を通してその研究内容を伝えようとするものである。

まずは加藤氏から、一節切尺八が織田信長などの武将や連歌師、僧侶、一般民衆に吹かれていたということ、一節切尺八は虚無僧尺八と違い竹の根っこの部分が上にくることなど、一節切尺八についての受容や構造が紹介された。続いて、尺八と一節切尺八の奏者で琴古流尺八「竹風会」の顧問を務めている飯田勝利氏による一節切尺八の独奏。一節切尺八と尺八の実物の比較の後、「手」と呼ばれる本曲の《挫（ひしぎ）》と《切（きり）》の 2 曲が音取に導かれて奏された。対となるこの 2 曲ともしみじみとした味わいである。身分のある人に吹かれていたという本曲の次には、江戸期から浅草周辺で歌われていた《ひらいたひらいた》と、古くから伝わる《かごめかごめ》が名古屋二期会の会員でもある高橋美智子氏の歌、中部大学卒業生で在学中に一節切尺八に出会ったという伊藤桃花氏と加藤氏の一節切二重奏で披露された。誰もが知っているおなじみのわらべうたではあるが、2014 年に出版された加藤氏編曲による一節切尺八の二重奏が加わると、より素朴でのどかな曲調に聴こえるのが興味深かった。また、オカリナの研究、演奏、普及にも力を注いでいる加藤氏にとっても一節切尺八を吹くのは容易ではなかったようで、「最初は音が出なかった」と語っていたのも印象に残る。

後半に入ると三味線が登場。三味線が使われるようになってから日本の音楽はがらりと変わったという。そこでプログラムは三曲合奏へと進み、加藤氏、飯田氏を含む名市大一節切尺八愛好会の 9 人による一節切尺八、生田流箏曲大師範で箏・三絃の三つ音会を主宰する筒井詠子氏の三味線、三つ音会の門下生である堀田真由美氏の箏による三曲合奏で《りんぜつ》《すががき》が奏でられた。演奏の前に現代と江戸時代の箏、三味線の違いが説明されたほか、半音を含まない調弦による《すががき》が半音を含んだ調弦による《六段の調べ初段》へと編作されたことが実演を交えて解説されたことも有益であった。最後は、江戸期中頃によく歌われていた短い俗謡である小歌《吉野の山》《近江おどり》《おかざき》の三曲合奏で締めくくられた。

会場には 270 人ほど。高校生から年配の方まで幅広い年代に亘り、約 1 時間半の公演を

熱心に聴き入っていた。「今の皆さんにとって江戸時代の音楽は単調かもしれないが雰囲気
を味わってもらいたい」と加藤氏は冒頭で語っていたが、普段聴く機会のない一節切尺八や
三曲合奏のゆったりとした穏やかな響きに包まれて江戸時代の音楽の営みを感じる得難い
時間だった。